

2023年7月31日(月)

老球の細道743号

7月の言葉

豪雨、猛暑と日本列島が大騒ぎの毎日であった。スポーツ、学力のレベルは低いといわれるわが会津であるが、猛暑に関しては連日全国トップレベルである。バスケットのレベルもこうありたいものである。

今年もまた蝉、トンボ、バッタたちが私を呼んでいる。孫が夏休みになり、山、川へ虫捕りが爺の仕事になった。熱中症に気をつけろといわれるが、すでにバスケ熱中症に感染。

1・テレビから

◆「死んでから仏になるはいらぬもの。生きてるうちによき人となれ」〈NHK「知恵和泉」〉：わが国最初の公害と言われる足尾銅山鉛毒汚染に命をかけて奮闘した田中正造の言葉である。企業と癒着して自然を壊す政治に対し、庶民がみずからを守る戦いに最後まで献身した激烈な生涯は、わが身の健康ばかりに心を奪われる私に痛烈な一撃を与える。

◆「世の中はひどい。それに同化するな」〈NHK「香港映画監督ラム・サム」〉：中国の支配下になった香港はかつての言論の自由がなくなりつつある。香港の人たちもそのような風潮に慣れつつあるところから映画『星くずのかたすみで』で訴える。

2・読書から

◆「おごる平家も久しくないが、おごらぬからと言って人間は久しくない」〈山岡荘八著『徳川家康⑩』講談社〉：己の大望をもうすぐ果たさんとしたが死は必然。死を間近にした豊臣秀吉の言葉である。私もおごってはいないが、歓喜の涙を流せる余生を送りたいものである。

◆「今すぐにも人生から去ることができるように おのおののこゝろを行い、言い、または考えること」〈岩崎允胤著『人類の知的遺産・ヘレニズムの思想家』講談社〉：練習においても「ラスト！」の時は集中して、全力でがんばれる。明けゆく毎日を私の最後の日と思えば、今日の今をどれだけ充実したものにできるだろう。理解できる年に近づいた。

3・新聞等から

◆「死者の記憶が遠ざかる時、同じ速度で、死は私たちに近づく。戦争の記憶が遠ざかる時、戦争がまた私たちに近づく。そうならなければ良い(石垣リン)」〈朝日：声〉：先月戦時下のロシアでワグネルのプリコジンが反乱を起こした。ウクライナ戦争は終わりだと思っていたが、戦火はさらに勢いづく。そしてバタフライエフェクト。日本は大丈夫か。

◆「救いがたい理想主義者だといわれるならば、出来もしないことを考えているといわれるならば、何千回でも答えよう。『その通りだ』と(チェ・ゲバラの言葉)」〈朝日：声〉：大いなる理想を掲げて発言すると、必ず冷笑を浴びせる人たちがいる。世の中を変える、組織を変える、自分を変える時には、それらの冷笑、嘲笑、批判に負けない「心のゲバラ」を持つ。

◆「バスケから 広がる宇宙 はてしなく」「バスケでも 休むことも 仕事です」〈原町高校時代の教え子佐藤隆一君の川柳〉：毎回手紙の最後にバスケット川柳を書き添えてくれる。いつまでもバスケを愛してくれる教え子がいることはコーチにとって最高の喜びである。